

論文の内容の要旨

氏名：中島 理恵

博士の専攻分野の名称：博士（薬学）

論文題名：薬剤師による生涯を通じた包括的な健康支援に関する研究

序論

わが国では、持続可能な地域医療の実現を目指し、地域包括ケアシステムを主軸とした政策が進められている。その中で薬剤師は、近年かかりつけ薬剤師や健康サポート薬局制度を通じて急速に地域医療の担い手としての地位を確立しつつある。特に予防医療における薬剤師の役割については、2015年に策定された“患者のための薬局ビジョン”において、薬剤師が専門性を発揮して、患者の薬学的管理・指導を実施するとともに、国民の病気の予防や健康サポートに貢献することが明記されている。すなわち、薬剤師には住民に対してより継続的かつ包括的な健康支援に関わることが求められている。このように、今後薬剤師はかかりつけ薬剤師業務などを通じ、地域住民の生涯に寄り添いながら健康支援をする機会が増えると予想される。

現在、薬剤師は様々な健康支援活動を行っているが、そのほとんどはライフステージで分けられた一時的な健康支援であり、多くの取り組みが高齢者を対象にしたものである。先述の通り、薬剤師にはより継続的かつ包括的な健康支援を行うことが求められるが、そのためには現在高齢者に偏りがちな健康支援の視点をより若い年代など幅広い世代のニーズにまで広げる必要がある。

そこで本研究では、薬剤師による生涯を通じた包括的な健康支援を推進するため、幅広い世代に向けて薬剤師による包括的な健康支援のニーズを調査するとともに、長期・継続的な服薬支援を必要とする患者の服薬実態や服薬を阻害する要因を明らかにした。さらに現在行われている薬剤師による多様な世代への服薬及び健康支援の実態を調査することにより、今後薬剤師に期待される包括的な健康支援を充実させるための課題を検討した。

第1章：かかりつけ薬局が取り組むサービスに対する住民の意識とニーズに関する研究

本研究では、2016年に我が国で導入された健康サポート薬局やかかりつけ薬剤師制度の中で行われているサービスが、実際に国民や患者のニーズを満たしたものとなっているかを住民へのアンケート調査により明らかにした。

調査は構造化質問票を用いてインターネットを介して無記名で実施した。調査項目は、回答者の基本情報に加え、薬局の利用状況、薬局サービスに対する考えや実際の利用可能性に関する情報とした。薬局の各種サービスに対する人々の考えと実際の利用可能性に関して性別や年代ごとの違いを比較した。

禁煙や栄養（ $p<0.01$ ）、及び病気予防（ $p<0.01$ ）に関する相談サービスは、女性より男性の方が懐疑的な意見を有していた。年金や福祉に関する相談サービスは、40-50代で積極的に利用したいという回答者の割合が高かった。加えて薬局の24時間対応（ $p<0.01$ ）、及びかかりつけ薬剤師制度（ $p<0.01$ ）については、若い世代でより必要性を認識していた。

かかりつけ薬局が目指す薬局サービスに対する住民の考えと実際の利用可能性には開きがあり、性別や年代によって異なることが明らかになった。若い世代の期待に応えつつ、医薬分業に対して懐疑的な世代への新たな薬局の役割の認知が必要であることが示唆された。

第2章：慢性疾患患者の服薬アドヒアランスに関連する要因

本研究では、慢性疾患患者における服薬アドヒアランス不良の実態と服薬アドヒアランスに関連する要因を年代別に明らかにした。

調査は構造化質問票を用いてインターネットを介して無記名で実施した。調査項目は、回答者の基本情

報に加え、慢性疾患治療薬の意図的および非意図的服薬アドヒアランス、健康に対する考え、生活習慣、及び患者が抱える薬の服用に関する問題とした。

20-59歳の非意図的及び意図的アドヒアランスは、ともに60代以上に比べて悪かった(非意図的 $p<0.001$, 意図的 $p<0.001$)。服薬に関する問題について、20-59歳の患者は全ての項目で有意に問題を抱えていた。重回帰分析の結果、20-59歳では、喫煙($\beta=0.280, p<0.001$)が非意図的アドヒアランス不良、飲酒($\beta=0.147, p=0.020$)、及び喫煙($\beta=0.172, p=0.007$)が意図的アドヒアランス不良と有意に正の関連が認められた。また、20-59歳では、健康的な食生活を心掛けていない($\beta=-0.136, p=0.034$)、及び運動の習慣がない($\beta=-0.151, p=0.020$)がそれぞれ意図的アドヒアランス不良と負の関連を示した。

上記の結果より、慢性疾患患者の服薬アドヒアランスは、若い患者ほど悪くなることが明らかになった。慢性疾患患者の服薬アドヒアランスは、健康に対する考え、生活習慣、及び服薬に関する問題に関連しており、年代によって異なる。良好な服薬アドヒアランスを維持するには、生活習慣や服薬関連の問題に関する指導を含む、年齢に応じた個別の包括的なケアの必要性が示唆された。

第3章：妊婦・授乳婦の薬物治療支援に関する薬剤師の情報提供活動

本研究では、薬剤師が妊婦・授乳婦に対してより充実した薬物治療支援を行うため、臨床現場の薬剤師に対してアンケート調査を行い、薬剤師による日頃の妊婦・授乳婦に対する情報提供活動の実態を明らかにした。

調査は構造化質問票を用いてインターネットを介して無記名で実施した。調査項目は、回答者の基本情報に加え、日頃の妊婦・授乳婦への情報提供活動経験や意識、および関連する知識の入手行動とした。

全回答者の96.8%が妊娠や授乳に関する問い合わせを経験していたが、92.5%が妊娠・授乳中の患者の情報提供を十分行うことができないと回答した。その理由として、妊娠や授乳に関する基本的な知識および薬物治療の知識の不足(37.9%, 37.7%)、伝えるべき情報の取捨選択が難しい(32.1%)、妊娠・授乳中の薬物治療について学ぶ機会がない(20.9%)、及びデリケートで話しづらい内容だから(19.8%)があげられた。

薬剤師への妊娠や授乳に関する相談は一般的に行われているにもかかわらず、十分に情報提供ができていると感じている薬剤師は10人に1人以下であった。多くの薬剤師は、妊娠や授乳に関する基本的な知識の不足を懸念しており、加えて妊婦・授乳婦とのコミュニケーションに障壁を感じていた。妊婦・授乳婦に対する薬剤師の薬物治療情報提供活動を充実させるため、薬剤師が苦手とする妊婦・授乳婦とのコミュニケーションや妊娠や授乳に関する基本的な知識を含む適切な情報源の周知を大学および生涯教育などに組み込む必要性が示唆された。

第4章：アスリートに向けた薬剤師によるアンチ・ドーピング活動

本研究では、薬剤師によるアスリートへの服薬支援の向上を目指し、薬剤師のアンチ・ドーピング活動の実態を明らかにするため、全国の医療施設に勤務している薬剤師を対象にアンケート調査を実施した。

調査は構造化質問票を用い、インターネットを介して無記名で実施した。調査項目は、回答者の基本情報、他の医療職種との連携状況に加え、アンチ・ドーピング活動経験等とした。

全回答者の21.4%、スポーツファーマシストの認定を持っていない薬剤師においても18.7%がアスリートからの相談を受けていた。アンチ・ドーピング相談の情報源として、JADA (Japan Anti-Doping Agency) の禁止表($p=0.009$)、Global DRO (Drug Reference Online) ($p<0.001$)を利用したのは、スポーツファーマシスト認定者に多かった。医師や栄養士といった他の医療職種との連携が取れる状況にある薬剤師は、自信を持ってアンチ・ドーピング相談に対応していた($p<0.001$)。

医療現場の薬剤師にとってアスリート対応は一般的に行われているが、アンチ・ドーピングに関する情報の提供方法には課題があり、大学教育や生涯教育の充実が求められる。アスリートへの健康支援をより効果的に行うためには、他の医療職種との連携が鍵となることが示唆された。

総括

本研究は、薬剤師による生涯を通じた包括的な健康支援の充実を目指し、多様な年代に向けて薬局や薬

剤師による包括的な健康支援のニーズを調査するとともに、長期・継続的な服薬支援を必要とする患者の服薬実態や服薬を阻害する要因を年代別に明らかにした。さらに現在行われている薬剤師による若い世代への服薬及び健康支援の実態を明らかにすることで、今後薬剤師に期待される継続的で包括的な健康支援の課題を検討する際のエビデンスを得た。

第1章では、地域住民に対して健康サポート薬局やかかりつけ薬剤師制度の中で行われているサービスの意識を調査したところ、若い世代におけるかかりつけ薬剤師への期待や年代により異なる多様な健康支援のニーズが明らかになった。また、第2章の慢性疾患患者を対象にした調査では、働き盛り世代における服薬アドヒアランスの傾向が明らかになったとともに、服薬アドヒアランスには、健康に対する考え、生活習慣、及び服薬に関する問題が関連していることが示唆された。

第3章及び第4章では、アスリートや妊婦・授乳婦といった若い世代に向けた薬剤師による医薬品情報提供活動等を含めた健康支援の実態が示された。薬剤師にとってアスリートや妊婦・授乳婦への健康支援は一般的に行われていたが、多くの薬剤師が関連する知識の不足や自身の対応方法に不安を感じていた。

一連の研究により、世代によって服薬行動や健康支援のニーズが異なること、また若い世代における薬剤師への期待が明らかになり、地域医療における薬剤師の継続的かつ包括的な健康支援の必要性が示唆された。一方で、生涯にわたる支援の一環である若い世代に向けた健康サポートについては、知識不足や対応方法に不安を感じる薬剤師がいることが明らかになった。

薬剤師が地域医療の中で継続的かつ包括的な健康支援を推進するためには、幅広い世代のニーズを把握し、各年代の健康サポートに必要な知識を習得し、かつ対応を磨き上げていく必要がある。そのためには大学教育や生涯教育の充実、更には多職種連携等の強化が効果的であると考えられる。